

最新事情

大学編④

多岐にわたるキャリアプログラムと
きめ細かい個別相談で就職力を上げる

文京学院大学

(東京都文京区)

文京学院大学は東京都と埼玉県にキャンパスを置く総合大学だ。文京区にある本郷キャンパスでは、外国語学部、経営学部をはじめ、4学部5学科の学生、大学院3研究科の院生が学んでいる。手厚い就職支援の取り組みが成果を出しており、毎年、就職率が高い。個別相談やさまざまな就職支援プログラムのほか、1年次から始まるキャリア教育と、生涯学習センターが開講する「秘書検定2級対策講座」について伺った。



文京学院大学本郷キャンパス。
ここで約2,800名の学生・院生が学ぶ

低学年からのキャリア教育で 実現する高い就職率

都内にある文京学院大学本郷キャンパスには、一般企業に就職を希望する学生が多く在籍する。一方、埼玉県にあるふじみ野キャンパスには専門職を希望する学生が多い。キャリア・社会教育センター長の吉村郁夫氏は次のように話す。

「ふじみ野キャンパスでは、児童発達学科や人間福祉学科、理学療法学科、作業療法学科などの学生が学んでいます。ほとんどの学生が卒業後は、保育や教育、医療や福祉といった分野の専門職で活躍したいと考えています。実習や国家試験があるため、授業をはじめ就職支援の

方法は本郷キャンパスとは若干異なってきました」。

今回は、本郷キャンパスのキャリア教育についてレポートする。

先述した通り、本郷キャンパスのほとんどの学生が一般企業に就職する。平成30年度の大学全体の就職率は98・5%。ここ数年高い数字を維持している。就職に強い大学」と言われる理由は何か。

「自らキャリアデザインを形成できる力を育成するために、本学独自のプログラムを導入しています。BUNKYO-Career Design Program (略称 B-CDDP) は学生一人一人の資質に合った将来の進路選択が可能になるよう、1年次から4年次まで段階的に行うプログラムです。外国語学部、経営学部、人間学部ではキャリアプログラムを授業科目に設定してカリキュラムを組んでいます」(吉村氏)。

経営学部の場合、1年次は自分をしっかり知る自己探索期。初年次支援プログラムでビジョンを設定し、キャリアイメージを大まかにデザインすることが目的だ。自己分析や進路の選択肢を抽出する。

2年次は学びの中で将来をイメージする就職準備期。啓発的経験プログラムに沿って、情報収集を行う。選択授業「キャリアデザインI」では、ディスカッションを中心に、働く意味を考えながらコミュニケーション力を身に付ける。



キャリア・社会教育
センター長の吉村郁夫氏



海外インターンシップでの一コマ。
ラオスで現地の職業訓練生に簡単な英語を教えた

(左から) キャリア・社会教育センターの大橋早苗アシスタントマネジャーと、中西明マネジャー



3年次は将来像に近づく適性発見期。いよ
いよ就職活動が本格化するこの時期は、就職活
動基礎・応用支援プログラムや業界別支援プロ
グラムなど、選択肢の絞り込みと企業情報の収
集に努める。キャリアデザイン科目では、エン
トリーシートの書き方・就職
活動におけるマナー・面接ト
レーニングなどを実施する。
4年次は自信を持って就
職活動を進め、内定を獲得す
る活動実践期。学生は、これ
まで行ってきた自己分析や

キャリアビジョンを基に就職活動を展開する。
教員とキャリアアドバイザーが連携して個別
相談が行われる。

吉村氏は個別相談の特徴を次のように話す。
「職員が学生とマンツーマンになり面談をし
ます。担当のスタッフが途切れることなく学生
と面談し続け、内定を獲得するまでサポートす
るのです。就職活動の進捗状況に応じた確かな
アドバイスができるため、内定が近づきます。
本学では、歯医者さんシステムと呼んでいま
す。歯医者さんの予約制のように、次の面談を予約
してもらい、継続して面談ができるようにして
います」。

何度も繰り返し返される面談で、職員と学生と
の距離も縮まる。なかなか内定が出ない学生に
は、職員が声を掛けるなど気に掛けることで、
就職活動へのモチベーションが下がらないよ
うに工夫している。

「経営学部と外国語学部の3年生の学生数は
現在、約550人。就職を希望する学生たち全
員と面談をするため、職員の負担は大きくなり
ます。しかし、こうしたきめ細かい支援が、就
職に強い大学」と言われる秘訣の一つなので
す」と吉村氏は胸を張る。

インターンシップで確実な 実践力を身に付ける

同学ではインターンシップにも力を入れて
いる。とりわけ外国語学部と経営学部では、イ

ンターンシップを正規の授業として導入して
おり、成果に基づいて2単位が認定される。

「期間は2週間、1カ月、3カ月とプログラム
によって異なります。国内はもちろん、海外の
実習先も紹介しています。単なる就業体験にな
らないよう、課題追求までできる研修先も用
意しています。学生たちは実務を体験すること
で、実践力を習得することができます。参加者
は増加傾向にあるため、受け入れ先の開拓が急
務です」(吉村氏)。

国内外の実習先は、約80社という実績があ
る。海外では、航空会社や旅行会社などで、語
学はもちろん、ホスピタリティも学ぶ。

「実社会を知り、職種・業界を深く理解するこ
とが、職業選択の際のミスマッチを防ぐことに
なります」と吉村氏はインターンシップを評価
する。

就職支援は、内定が出たら終わりではない。
卒業・就職しても成長し続けてほしいという願
いもあり同学では、「職場適応定着支援」「卒業
生異業種交流会」を開催しているのだ。

また、学生自らが行動力を養うことを目的に
した学生主導型の活動がある。学生が職業や進
路情報の取材・発信を主に行う「学生キャリア
リーダー」や、学生と卒業生、採用担当者、社
会人との出会いの場を提供する「The Bs Way
プログラム」など多岐にわたる。

「社会との接点を多様に持つことで、社会で
必要とされる力を身に付けることができます」

(左から) 外国語学部2年生の市川佳奈さんと、経営学部2年生の塚本珠翠さん。二人とも学内講座を受講して秘書検定に合格した



(吉村氏)。

高い就職率を維持するために同学では、資格取得も大きく打ち出している。

生涯学習センターでは、「資格・検定試験対策講座」「学内・学外受験検定試験」「就活支援講座」を開講している。

「秘書技能検定試験2級」は学内受験が可能な検定試験の一つだ。生涯学習センターを担当するキャリア・社会教育センターの大橋早苗アシスタントマネージャーは、毎年新入生向けガイダンスの中で次のようなメッセージを贈っているようだ。

「秘書になる人だけが受ける検定ではありません。ビジネスマナーや言葉遣いは、職種に限らず社会人の基本として求められる常識です。学生のうちに合格することをお勧めします。とりわけ、1〜2年といった早い時期に挑戦してほしい検定です」。

大橋氏の話を聞き、隣でうなずくのは同センターの中西明マネージャーだ。「3年生になると就職活動がいよいよ本格化し、履歴書やエントリーシートなどの準備に追われて忙しくなります。比較的、時間がある低

学年のときに挑戦し、就職力の向上につなげてほしいという思いがあります」。

秘書検定は、早い時期に挑戦してほしい

受講生はやはり1年生が多いそうだ。昨年、1年生のときに合格した2人の学生にインタビューをした。

外国語学部2年生の市川佳奈さんは、平成30年6月に2級、同年11月に準1級に合格した。「スキルを上げて就職活動に臨みたいと思い、秘書検定の講座を受講しました。マナーや敬語を学ぶことを楽しく感じ、準1級にも挑戦することに。外部の対策講座を受講したことも、よい経験になりました。実際に秘書職に就かれている方と話すことができ、実社会をのぞけた気がします。マナーが習得できたことで自信が付き、アルバイト先でも褒められることが多くありました。将来は、秘書職も視野に入れて、就職活動を頑張ります」。

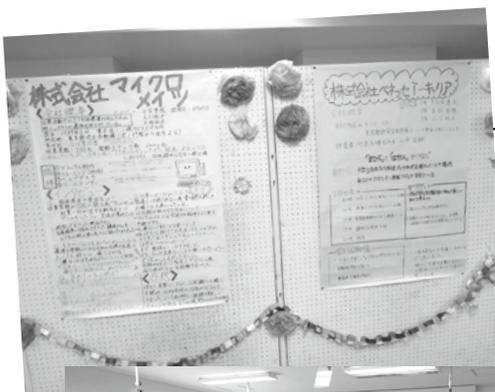
経営学部2年生の塚本珠翠さんみどりも昨年6月に2級に合格した。

「秘書検定の内容を見たとき、社会人として必要なことが学べると思いました。尊敬語、謙譲語といった言葉遣いはもちろん、冠婚葬祭の知識を学ぶよい機会になったと思います。苦手な問題もありました。上司がいけない場合の電話対応は、実際

の場面をイメージしづらくて困りましたが、講師にパターンを覚えることが大事だと教わり、苦手意識がなくなりました。集中すればすぐに身に付く内容なので、早い時期の受験をお勧めします」。

上位級への意欲も語ってくれた2人。「悔いが残らないよう、大学生活を全うしたい」という思いがひしひしと伝わってきた。

早めの行動が、学生のためになることを教職員は知っている。学生と向き合い、必要ときに声を掛け、的確なアドバイスを。きめ細かい対応が、高い就職力につながっていることを感じた取材だった。



文京祭で企業訪問の取材内容を発表した(左) 学生キャリアリーダーが所属するキャリアリーダー委員会の様子(下)

